

日本ロレンス協会ニューズレター No. 31

2016年12月25日

日本ロレンス協会会長 浅井 雅志
副会長 田部井 世志子

会員の皆さまにおかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、今年度の日本ロレンス協会第47回大会は、6月11日（土）、12日（日）に愛媛の松山大学で開催され、成功裏に終了しました。例年のように、力のこもった発表、それにシンポジウムやワークショップでの活発な議論が戦わされました。以下、内容を備忘録的に概観しておきます。

まず11日は、大山美代氏が、*The Plumed Serpent* におけるケイトの攻撃性という新たな視点から、その攻撃性が死の欲動と連動しつつ自分にも向けられ、しかもそれがラモンへの愛と表裏一体の関係にあること、しかもその攻撃性＝死の欲動を密かに「享楽」しているのではないかという非常に刺激的な論を提示されました。続く角谷由美子氏は、ウィトゲンシュタインとそれを援用するリオタールの「知のステータス変化」、すなわち「知が新しい流通回路にとって操作的であり得るためには、知識が多量の情報へと翻訳され得るものでなくてはならない」という「予言」を下敷きにして、D. H. Lawrence と Iris Murdoch の作品を比較検討し、ロレンスの作品はリオタールの「予言」の正しさを示す成功例であると結論されました。これまた新たな視角からの挑発的な論でした。その後は、木下誠氏の司会・構成によるシンポジウム、「マモン神に抗って——モリス、ロレンス、オーウェル」が行われました。まず木下氏が、モリスの強い影響を受けた「キボ・キフト同胞団」の運動に象徴される当時の反拝金主義へのロレンスの共感を丁寧に説明されました。続く福西由実子氏は、オーウェルの *Keep the Aspidistra Flying* における主人公の「拝金主義批判からポジティブな折衷案」への変化をたどりつつ、オーウェルがこの結末に込めた意味を考察されました。最後に川端康雄氏は、*Sons and Lovers* やロレンス後期のエッセイから多くの例を引きつつ、モリスの芸術および社会思想がいかに関ロレンスに受け継がれているかについて説得力をもって論証されました。

12日には、岩井学氏の司会・構成で、ワークショップ「ロレンスと短編——短編というテキスト空間における他者表象」が行われました。岩井氏の概要説明の後、中林正身氏は、まずロレンスがこれほどたくさんの短編を書いたという事実を取り上げ、*Aaron's Rod* 以降は“serious English novels”をやめて“story novel”を書くという書簡中の言葉に注目して、それを、多くの書簡を引用しつつ、あまり論じられることのないロレンスの金銭感覚と結びつけるというユニークな論を提示されました。続く横山三鶴氏は、ロレンスの作品中の「眠

り姫物語」とも呼べる一連の小説群に注目し、とりわけ「馬仲買の娘」と「ヘイドリアン」を論じつつ、他者による眠りからの目覚めというプロットにおいて、実は目覚めさせる者と目覚めさせられる者との境界は意図的にぼやかされ、それによって接触による目覚めの可能性を追求しているという斬新な解釈を提示されました。最後の井出達郎氏は、「馬に乗って去った女」「島を愛した男」「死んだ男」の3作品に共通する主人公の固有名の喪失という事態に注目し、それは共同体からの拒絶ではなく、むしろ名を失うことによってこそ、他者の他者性を強め、自己を他者に開き、かつ受容することができるとし、そしてこのような事態をデリダの言葉を使って「歓待」と呼ばれました。考えさせられることの多い重厚な論でした。これらの発表に刺激されて、引き続いての議論も活発なものになりました。

この2日間の大会のために、会場設営と大会運営にご尽力いただいた岡山勇一先生、新井英夫先生ならびに松山大学のスタッフの皆さま、会計担当の福田圭三先生をはじめとする関係者の方々に、心よりお礼申し上げます。

次に、総会での審議および決定事項をご報告申し上げます。

1. 次回開催校と大会日程

倉田雅美先生、石和田昌利先生のご尽力により、第48回大会（2017年）は東洋大学にて7月22日（土）・23日（日）に開催することになりました。両先生、どうぞよろしくお願いたします。

なお、第49回大会の開催校は現在検討中です。

2. 新体制について

今回はかなり大きな変化がありました。学会誌にも掲載しますが、ホームページの「協会役員」のサイトをご覧ください（<http://dhlsj.jp/dl/yakuin2016.pdf>）。

3. 2015年度会計決算報告と2016年度予算案

会計の福田圭三先生からそれぞれ報告と提案があり、承認されました。福田先生、ならびに会計監査の加藤洋介先生と星久美子先生、誠にありがとうございました。

4. 予算をめぐる議論と事務局の変更について

本項目については既にメールでお送りした「ニューズレターNo.31」のファイル（メールアドレスのない方々については郵送させていただいた書類）をご参照ください。事務局についてはホームページの「お問い合わせ」（<http://dhlsj.jp/contact.html>）と「事務局からのお知らせとお願い」のサイトをご覧ください。

5. 今後のニューズレター等の発信方法について

事務局の変更に伴って、これまで国書に発送をお願いしていたニューズレターのあり方も一新し、今後は基本的に、協会のホームページ（<http://dhlsj.jp/>）に掲載し、メールアドレスのない方々にのみ郵送するという形にしたいと思います。今回がその第 1 回目ということになります。

つきましては、メールアドレスの変更等がございましたら、事務局宛にご連絡ください（tabei@kitakyu-u.ac.jp）。また、これまでメールアドレスの登録のなかった皆様につきましても、よろしければメールアドレスを事務局宛にご連絡いただければと思います。

以上、大きな変更を私の代で行うことになり、関係者には多大なご苦勞をおかけすることになるとは思いますが、良い結果を生み出すことを期待しています。

* * * * *

さて、6月から7月にかけて来年度のシンポジウムおよびワークショップに関して皆様にアンケートをお願いしましたが、テーマとしては「情動 (affect)」、「歓待」、「靈性」、「日本文学とロレンス」、「冷戦」、「エコフェミニズム」、「ロレンスにおける仕事観」、「フィクションにおけるリアリズム」等々、またロレンスの詩や短編を中心に扱ってほしいなど、様々な観点からご意見をいただくことができました。来年度のシンポジウム、ワークショップにこれらのご意見を参考にさせていただきます。貴重なご意見を本当にありがとうございました。

それでは皆さま、来年の7月に東京でお会いしましょう。

お知らせ

前号でお知らせした、英国ロレンス協会主催で、ロレンスのコーンウォール移住 100 年を記念する国際学会に参加してきたので、簡単にご報告いたします。プログラムその他は www.lawrencecornwall.wix.com/conference をご覧ください。場所は St Ives、期間は 12-14 September 2016、テーマは“Outside England...Far off from the World”: D.H. Lawrence, Cornwall and Regional Modernism でした。参加者総数は約 50 名で、2-3 年に 1 回行われる大きな学会よりは小ぶりでしたが、その分、親密な雰囲気の中で進行しました。またセッションに分かれることもなく、全員の発表を聞くことができたのもよかったです。場所はセント・アイヴスの中心部から少し離れた大きなホテルで、施設もなかなか立派でした。（偶然ですが、すぐ近くにかつてヴァージニア・ウルフがよく滞在していた大きな家が残っていて、外から見てきました。）日本からの参加は岩井学氏、角谷由美子氏、星久美子氏、そして浅井雅志でした。

内容は今回も多岐にわたっていましたが、発表時間については前回のイタリアと違って

英国的に（？）かなり厳格で、その分、発表の後の質疑応答にかなりの時間をとることができました。発表そのものよりこちらの方が面白かったものもありました。印象的には前回のイタリアでの学会の時とよく似ていて、研究者の関心は、ロレンスの残した小説や詩やエッセイという言説群から派生するさまざまな分野へととめどなく広がっているように感じます。こうした傾向はこれからますます広がると思われるので、多くの協会員がこういった会に参加され、刺激を受けられることを願っています。

ついでですが、一昨年のイタリア、ガルニャーノでの学会の発表のいくつかを集めたものを、Simonetta de Filippis の編集で、*D. H. Lawrence: New Critical Perspectives and Cultural Translation* という形でまとめたものが、今年の8月に Cambridge Scholars Publishing から出版されました。私も著者の一人なのですが、日本風に著者への無料配布というものはないようで、今回の会場で初めて目にしました。ご参考までにお知らせいたします。